

	食品衛生の観点(が主体)である。 ▪ (独)食総研等との連携をさらに密接にして、問題点の改良にも留意すべきである。
その他	▪

10 環境ホルモン物質が溶出する恐れのない食品包装容器の開発

現状分析	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本課題は一段落ついたと考えるところである。 ・ 民間企業等のテーマ公募したところ、応募がなかったため、平成14年度の取り組みはない。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一部基礎検討に留まるものもあるが、製品化をめざすとされるものも見受けられる。 ・ 民間企業の自己資金による開発が見込まれているが、紙主体の食品容器の加工技術開発を別途実施する必要がある。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実用場面でチェックする必要がある。 ・ 今後の進捗はどのような思想で実行されるのか疑問である。 ・ 特許を申請し実用化につなげるべきではないか。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ 環境ホルモンフリーを掲げるための対象物質として想定されているノニルフェノール、フタル酸エステル、ビスフェノールAについて、この「フリー製品」が商品化された場合、換言すれば農水省としてこれら物質を「環境ホルモン」と認めたことにならないか？ 食品用途としては溶出を懸念することになるが、上記のいずれも「ホルモン用活性をもつ物質」ではあるかもしれないが、「環境ホルモン＝内分泌かく乱による有害影響を示すもの」としてのヒトへの確定評価がなされているわけではなく、溶出からみたりスク評価がなされているわけでもない（フタル酸エステルにしても、動物実験での生殖器毒性物質ではあっても、「内分泌かく乱（有害）物質」とは判断されていない）。こうしたリスクの概念の整理がないまま、「環境ホルモンフリー」を謳うのが妥当かどうか懸念するところである。 ・ 平成14年度は予算配分されていないが今後どうするのが疑問である。

11-1 農林水産業における内分泌かく乱物質の動態解明と作用機構に関する総合研究

<p>現状分析</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・重要度が高い化学物質に関して、農耕地からの分解・除去技術、吸着・拡散防止技術を生物学的、化学的に行うための基礎研究であると認識する。 ・全体として研究対象とする物質の選定順位の根拠が明確ではなく、散漫になっている印象がある。 ・数多くの興味ある結果が得られており、順調に進んでいると判断される。 ・ダイオキシンや PCB に注力しているが、事業間で重複がみられ（事業3など）、整理統合することにより、農薬の流出防止技術の確立や内分泌かく乱物質である可能性が疑われているその他の物質に関して注力できるのではないかと考えられる。 ・土壌粒子径によってダイオキシン濃度が異なる結果が生じる理由についても明らかにされたい。 ・農耕地（耕地・水田）からの移行流出拡散の比率を明らかにされたい。 ・いろいろな課題を取り集めて実施している感じがある。最終年度に向けて、課題の取りまとめをしっかりと行ってほしい。 ・ダイオキシンの分解菌に関する研究が行われているが、その実用性についての検討も行って欲しい。 ・推進体制の変更についての外部専門家委員会の役割を示して欲しい。
<p>実施目標の達成度</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・おおむね当初の目的は達成されたが、技術システムとしての統合性の達成と現場への適用はこれからの課題である。 ・防止技術のうち主要な技術は何かを示して欲しい。 ・微生物機能の利用を農耕地で発現可能とする根拠を明示されたい。
<p>具体的改善点</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・農耕地への流入防止技術としての展開も期待したい。 ・H14年度で耕地・水田での拡散防止技術を確立すべきである。 ・各種技術の統合（Integration）、研究チームの連携を図って欲しい。 ・ダイオキシンなどの分解速度は十分でなく、実用化のためには POPs 浄化技術などテーマを絞ってプロジェクトを進める必要がある。
<p>その他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・微生物機能を利用する防止技術確立への明確な道すじを検討すべきである。 ・水田より耕地からのダイオキシン類の流出・拡散防止が重要であると思う。

(11-②) 事業名 農作物等有害物質総合調査委託事業

現状分析	<ul style="list-style-type: none">・ 農作物の汚染実態調査として概ね妥当な取り組みと考えられる。・ 測定試料の代表性はどのように検証するのか。
実施目標の達成度	<ul style="list-style-type: none">・ 実測分析データを取るという点では、所期の目標は達成されたと考えられる。
具体的改善点	<ul style="list-style-type: none">・ 現状に関する分析と評価があいまい（対策が必要な状況であるのか否かリスクアセスメント的な表現がない）。
その他	<ul style="list-style-type: none">・ 重金属類とダイオキシン類とをばらばらに解析するのではなく総合的に見て欲しい。